

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2274100524		
法人名	寿康会		
事業所名	グループホーム高松		
所在地	静岡県駿河区高松2625		
自己評価作成日	平成31年2月23日	評価結果市町村受理日	平成31年3月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/22/index.php?action=kouhyou_detail_2018_022_kani=true&jigyosyoCd=2274100524-00&PrefCd=22&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社第三者評価機構 静岡評価調査室		
所在地	静岡市葵区材木町8番地1 柴山ビル1F-A		
訪問調査日	平成31年3月14日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

長い間入居していた方を看取り、入居の方々は、新しいメンバーになった。職員も定年退職する方が続き、職員も入れ替わった。今までにない変化に、戸惑いながらも、一から見直す機会として、会議を重ねながら取り組んできた。社会の流れなのか、年々生活保護の方が増え、今年度は全員生活保護となった。また、最近の入居者の方は、施設から直接の受け入れも多く、実際の生活や健康が解らない。そんな中でも今までの経験や知識を生かして、より良い生活の在り方を考えてきた。身寄りがない方も多く、より家庭的な雰囲気や対応を求められるように思う。拘束ゼロを継続し、一人一人の問題を解決してきたことをこれからも続けていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

病院や介護老人保健施設からの入居者については、先方の「とにかく出したい(移設)」の意向が強く、情報が十分ないままで受け入れざるを得ない状況があり、また7割の利用者は家族も身元引受人もおらず、既往症や生活歴も不明だったり、在宅酸素、パルーンカテーテル留置、インスリン投与等の医療処置の必要な人もいます。到底無理なケースばかりなもの、ベテラン看護師である管理者の指導の下、新しい職員体制で奮闘する様子には頭が下がります。このような中でも地域とのカラオケ会も継続され、「どこか行きたいところか?」に、「泳ぐ象がみたい」との言葉が飛び出した際にはサファリパークへの外出支援を実現させています。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新しい職員が増えて、開所当時の事は、解らなくなっている。会議のたびに、今までの経過や理念の出来たことを話しながら、仕事に生かしている。	理念は食堂に掲示してあり常に目に入ってきますが特段唱和等はしていません。職員がリーダー研修に行った際「理念を作る」という課題で、「お互いに職員同士が責めないように」と決めた理念で、皆の総意です。	新体制となったことで理念についてあらためて職員間で話し合うことを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町内会に入り、出れる行事や防災訓練などには積極的に参加している。一部の利用者は買い物にも出かけられるため、そこでの交流も出来ている。	前・自治会長が主宰するカラオケ会は毎月継続されて事業所の周知度は年々上がり、昨年6月の起震車体験では回覧板で呼びかけたところ、近隣住民が10名ほど集まってくさっています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方からの相談には積極的にのるようになっている。地域で利用したい希望がある場合は積極的受け入れたいと思っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議もやっと軌道にのり、定期的に開かれるようになった。家族の参加は無いが、その時々で行事への参加も含めて、意見を聞けるようにしている。	「運営推進会議は事業所を知ってもらえる場」と捉え、行事併催するなどの工夫を計っています。現在第3回まで開催され、本年は計4回となる予定で、「年6回」との課題は次年度に持ち越される見込みです。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	全員が生活保護となり、新しく入居の方は申請中の事もあり、より連携の必要性を感じている。今後も困難事例も含めて伝えていきたい。	市役所、地域包括支援センターには毎回運営推進会議の案内を出し、議事録も郵送提出しています。生活保護者もいるため市役所とは連携しつつ、困ったケースを相談できる関係を築いていきたいとしています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠の無くし、そのことで外に出てしまっ大変なケースもあったが、身体拘束をしないケアを継続するために、今後も一人一人のケアを考えていきたい。会議のたびに、拘束の問題については議題にしていく。	マニュアル・指針を整備し「身体拘束廃止委員会」を第2回まで、また研修会を1回実施していますが、未実施を残すため年度末に向けて急ぎおこなう予定です。緊急やむを得ない場合の三要件の該当者は現在ありません。	法改正にあたっては減算対象とならないよう、書面整備のうえ1冊のファイルに収めていくことを期待します。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待については、言葉での虐待もあるため、声掛けや、対応に注意し、必要時は管理者から注意していきたい。入居者からの声も聞き逃さないようにしたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	最近は成年後見人制度を利用している方もいるため、職員全体で学習する機会を設けて、理解を深めるようにしていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明は行っているが、様々な叙階的な理由により、家族がいないケースも増えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族がいない人が半数以上になり、家族の要望は聞けないことが多い。生活保護のため、経済的にギリギリの生活を強いてしまうことが多い。	身よりのない人が多く、家族がいる利用者は2名のみです。親子関係の悪化も伴い周辺症状が心配された利用者も、此处で暮らすうち落ち着いて会話ができるようになり改善の兆しが見られています。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回の定例会議は定着している。新しい職員が増えたため、ケアの仕方や、問題の解決方法などみんなのものに出来るように考えている。	新管理者は現場経験者で職員も相談しやすい関係にあって、毎月の定例会議は新人職員もわからないことを率直に尋ねられる場になっています。職員意見から1日の流れを変え外出を増やした例もあります。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	本部の施設長の連絡を取りながら、環境の整備に努めている。建物が古くなり、キッチンのリホーム等、働きやすい環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修への参加や、会議での学習など出来ることから実践している。バルーンカテーテルの管理や糖尿病のインシュリンの問題など医療的なことも徹底できた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修会への参加により、他の施設との交流は出来るが、今年度は勤務の関係から、充分には出来ていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今年度は看取りも多く、そのために新しい入居者の出入りも多かった。家庭に問題を抱えるケース、経済的に困難なケース、本人よりも家族・施設とのやり取りが困難なケースが多い。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	関係づくりは出来るように努力してきたが、家族がいなかったり、関係を拒否するケースもあり、今までとは違った困難さを感じている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	必要としている支援が、グループホームの趣旨とは異なることもあるが、本人が一番安心して暮らせることを第一目標にと考えてきた。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	初めての関係づくりは困難なことも多いが、出来るだけ、本人の希望を聞きながら、無理しない関係づくりに心がけてきた。		
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	共に本人を支える姿勢は大切だと思いつつも、家族に負担がかからないようにという思いが強い。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現状では難しい。町内の方たちとの関係づくりを大切にしている。	生活歴が分からない人も多いため、事業所を訪れる介護相談員や自治会長が馴染みとなった人もいます。居室で海外アーティストのDVDを大音量で聞いたり、日がな1日草取りが日課の人もいます。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人で過ごすことが好きな方が多いため、逆に無理強いしないようにしている。自然に生まれる関わりをその時々で大切にしている。その様子を職員間で共有できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを実施しているため、その後の関係はない。最後に良かったと思われるような関係を作れるように努力している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	勤務の関係で、すぐに希望は叶えられないが、少数でのドライブや、外出等、今年度は実施できている。	半数近くが一日の大半を居室で過ごし、食事時間のみ集まるという生活が続いていますが、干渉されたくない気持ちを尊重しています。「どこに行きたい？」に応え、富士サファリパークまで出かけたこともあります。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	把握することが難しく、これまでの暮らしは解らないことが多い。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	変則勤務の中で、申し送りは確実にやり、健康面や生活、困っていることなどは、職員全体のものになっている。健康面についてはすぐに対応できている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	会議で様々な意見を聞きながら、介護計画の中に反映している。急な問題に関しても、職員と朝に話し合いながら、解決できるようにしている。	「褒めると頑張ることもあり声かけをしながら様子を見る」「頻回な関わりは逆に不穏になるため職員間で注意する」などよく観察している事柄が介護計画書に反映されていて、職員間の連携が受け止められます。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録については、各勤務で十分に記入されているが、問題が無い方については、記録が少ないこともある。話した内容などを記入することも必要だと思う。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	開設当時の方がほとんど亡くなり、ニーズも変化してきた。最近は緊急のケースもあり、情報の少ないまま受けることが増えた。施設から入居してくることが多く、対応に苦慮する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の利用はほとんどないが、町内の行事には参加できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	在宅医療を受けているため、適切な医療を受けている。	月2回訪問診療をおこなう協力医に全員が変更し、受診にあたり特記事項は個人記録、通常は日誌に記載しています。普段は看護師資格を持つ管理者が医療処置に対応しています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が兼務しているため、健康面の情報はすぐに報告し、適切な対応、処置が来ている。パルーンの管理も全職員に徹底している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	身寄りがない方が多いので、入院となったときには非常に困難だと思われる。出来るだけ早期発見、治療に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りを行っているため、最後まで苦しくないように過ごすことが出来るようにと考えている。家族との連携がとりにくい、家族の思いは大切にしたい。	協力医院の看護師からも助言を受けるとともに、ベテランの管理者(看護師)と夜中でもラインで繋がっているという安心感の中、「苦しくないよう」「褥瘡ができないよう」励んだ結果、やり切った達成感に満ちた看取りとなり、本年度は3名をお見送りしています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	看護師との連携がとれているため、いつでも電話での対応を取りながら、緊急時に対応できるようにしている。急変時は、看護師がいる場合はすぐに対応できる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	併設している事業所との合同訓練を実施しながら、防災計画書を通して実践できるように訓練している。津波に関しては、来ない場所であることを確認しているが……。建物の老朽化も進み、改築を望んでいる。	起震車を招いて地域住民の参加も得ることができ、消防署職員の立合いでは消火訓練において「窓を開けてはいけない」「自分の身は自分で守る」等避難の方法を指導してもらっています。	早期に夜間想定訓練の実施を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	時々、言葉かけが不適切だと思われる時には、ホーム長が指導しながら、一人一人を尊重する関係を作っている。プライバシーの保護は、スクリーンの使用などにより確保できている。	「呼称はちゃんづけしないとということは徹底しています。多目的室には日中休養するためのベッドが設置され、排泄等はベッドスクリーンを利用して羞恥心への配慮があることを視認しました。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望は出来るだけ聞くようにしている。特に、入居者への不満、職員への不満などについては、出来るだけ早めに解決できるように、ホーム長が中心となり話し合いを持っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴はホームの日課で実践しているが、行事やカラオケ等、職員が利用者の意向を聞きながら、楽しい時間を作れるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	経済的に余裕がないので、購入することは難しいが、洗濯した清潔な衣類で着替えられるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人一人の好みは解っているため、嫌いなメニューの日は変更するなど配慮している。準備が出来る人はいないが、片付けは手伝ってもらっている。	食材は生協で肉、魚を注文、野菜は2～3日に一度買い出しのうえ、職員が献立を考え、手作りで提供しています。食事摂取に時間を要する人は早めに食べ始め、場所も画一的でなく意向に合わせています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	糖尿病の人が増えたため、メニューやご飯の量は配慮している。誤嚥の危険がある方は、ミキサー食にして状態にあったものを提供している。今年度は市販品はやめて、その日のものをミキサーしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	寝る前に口腔ケアを実施できるようにしているが、徹底出来ていない部分もあるので、検討していきたい。(自分でやる方)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	年齢を重ねることで、失禁の回数も増えて、対応に困るケースもあるが、声掛けの回数を増やすなどして、出来るだけトイレでの対応を考えている。便の失禁も多く、難しい面もある。	失敗した布パンツを居室に脱ぎ捨てる例では原因が明瞭となり改善された一方で、バルーン留置の抜去を試みたもののお腹が膨らむため断念したケースもあり、こちらは毎日の陰部洗浄で感染症を防いでいます。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々に応じた薬の検討や、必要時は浣腸をしながら、不快な状態にならないように細かくチェックしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望も聞き入れるようにはしているが、日程にそって、入浴を実施している。一人で入れる方は少ないため、二人で介助しながら、安全に出来ることを第一にしている。	寝浴、ミスト浴、個浴の3種類があり、現在寝浴使用者はいません(ミスト浴は5名、個浴3名)。週2回を目安とし、足し湯のため肝炎の人は最後としています。職員とのおしゃべりで笑い声が廊下まで聞こえる日もあります。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の徘徊は、入居者からの苦情が出る場合もあるため、生活リズムを整えながら、夜間は眠れるような環境を作るようにしている。特に夜間の転倒などには巡視で、安全の確認をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬は大切なため、個人には任せず、服用したことを確認するように徹底している。誤薬や飲み残しが無いように、申し送りも徹底している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	年に数回ではあるが、ドライブ、外食が出来るように計画している。月1回の誕生日会や、食べる楽しみを増やして、一人一人の「楽しかった、おいしかった」を聞きたいと思っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族の協力による外出は出来なくなった。色々な問題を抱えているため、日常的な外出支援は難しくなったと思う。(経済的、精神的な問題)	本年はサファリパークや富士川楽座、日本平での桜の花見などの実績があります。年間計画としての外出は決めず、「そろそろ行きたいね」という利用者の希望から立案、併設事業所的大型車輛を活用し、遠出の場合は2～3ヶ月前から計画を立て準備しています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	生活保護のため、一人一人にお金を持たせることはしていない。必要時に、一緒に買い物に行くようにしている。ギリギリの生活である事を伝えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	出来る人がいないため、ほとんど支援はしていない。必要時はいつでも対応する。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日常的な写真を貼りだしたり、出かけたら、みんなで楽しかったことを共有するようにしている。居室は殺風景だが、清潔には努めている。	玄関には季節毎に利用者と職員の合同作品が掲示され、また日勤が多目的室、食堂を清掃、次亜塩素酸を薄めて拭いていて、清潔な空間です。本年は業者から医療用ハイターを譲り受け、お粥を吐物に見立て、吐物処理の方法を学んでいます。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人一人の生活空間は決まっているので、落ち着いて過ごせるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	何も持ってこないことが多いので、特に工夫はしていない。	ほとんど着の身着のままの入居が多く、ベッドや布団、タンス、プラスチックの衣装ケースや衣類まで、退去した利用者の生活用品を活用していて、居室というより寝室といった印象です。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒やケガなどが無いように、環境には注意している。ベット柵が危険な時には、工夫してケガが無いように考えている。バルーンがついている方は、ベットを高くするように指導している。		